

廣大。草木生之。禽獸居之。寶藏興焉。今夫水。一勺之多。及其不測。黿鼉蛟龍魚鼈生焉。貨財殖焉。是れ天地の天地たる道は、一言以て言盡す事を得べし、其道は唯一個にして生物の作用は測知すべからず、天は昭昭の明を積みたるに過ぎず、地は一撮土の多きに過ぎず、水は一勺の多きに過ぎざれど、其天の無窮、地の博厚、山の廣厚、水の不測なるに至つては、人智を以て知るべからざるに至る、之と同じく天地の道も唯一個の物なれど、其用は廣大無邊なりと云ふにあり。(中庸)

又曰く、誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道。聖人也。誠之者。擇善而固執之者也。之れ性のまゝにて誠なるは、天道の自然なれど、人々皆然る能はずして、力めて天道の誠に達するあり、これを人の道と云ふなり、天道の自然に従ふ人は、事々皆道に中りて、所謂生知安行の人なり、次に善道たることを知りて、之を擇び之を固守するなり、乃ち

是擇善固執の事にて、道に入る方法なりと云ふにあり。(中庸)

孔子の作と稱せらるゝ周易の序卦に曰く、有天地然後有萬物。有萬物然後有男女。有男女然後有夫婦。有夫婦然後有父子。有父子然後有君臣。有君臣然後有上下。有上下然後禮樂有所錯。之れ天地の創造より萬物を生じ、人類の起原より家族、社會、國家の組織に至る順序を述べたるものなり。之を要するに支那の古聖賢は、天地即ち大宇宙を以て、森羅萬象を包擁する一大活動の本體と爲し、此の活動體には一定不變の法則あり、萬物は皆此の法則に従はざるべからず、而して人類は此の法則即ち天道に従ふべきものなり、之を人道とす、天道は誠なり、人類は善を擇びて之を固守せば、天道に合致するに至るべしと云ふにあり。

現在獨逸哲學の老大家オイケンは、人格的宇宙の精神生活と活動主義を高調し、人と宇宙の關係に付き、精神生活は人間の内に現在し、活動しつつあるが

故に、人と宇宙との間には結合の可能があつて、且人は宇宙的生涯を営み得るものなることを知らねばならん、又人の宇宙的特質は知情の働きの外意的活動なる道義の方面に著しく現はれてゐる、見よ「義務」の觀念は舊き世界を意味し、又之に反對なる新世界を暗示し、新らしき世界は「愛の國」なる人生久遠の理想を啓示する眞の愛は、單なる主觀的感情ではない、そは自我を他我の中に見出し、又他我を自我の内に攝取して、生の發展と深甚を圖るものである。生は愛の働きのよりて其偉大廣汎を加ふ、而して愛の働きのには限界あらず、無限を目的として發展向上し、單に人類のみならず宇宙の萬象の凡てに及ぼす、人は其愛を萬物に及ぼして、始めて萬物の內的實在に透徹することを得るのであらふ、斯くて吾等は愛の世界に眞我を見出し、宇宙全體の内より我等自身を創造し、此無限なる大宇宙を目的として、向上の努力にいそしみ、無限の生命を味ひ得るのであると云へり。(帆足理一郎氏著哲  
理と人生に據る)

論語に子曰。參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問。曰何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。之れ忠は眞心なり、恕は同情心なり、孔子の道は仁なり、仁は愛他心を根本とす、其心をして中和を得、以て極に達せしめんには、眞心以て行はざるべからず、同情心以て衆に及ぼさざるべからざるなり、是れ所謂吾道は一以て之を貫く所以にして、又一には忠恕なりと云ふにあり。

韓愈の原道に曰く、博愛之謂仁。行而宜之之謂義。由是而之焉之謂道。又近世の大哲カントは、天空に羅列せる星辰界に行はれる秩序整然たる運動の法則、又吾々が内省して見出す良心の法則、これら宇宙間に存する理性の大法則、所謂最高命令又は無上命令に服するは人たるの道なりと唱道せり、古今東西期せずして遙に相呼應す、是れ眞理の流露なればなり。然るに科學の發展進歩したる現代に於て、聖賢の高唱したる哲理を援用するも、証據に依り之を証

明するにあらずんば、萬人を首肯せしむること能はず、其証據を提供するものは自然科学即ち物質科學なり。而して科學は五官の作用に依り、實在と認むる百般の事物を取扱ひ、之を研究することを原則とする學問にして、之に依り宇宙と人生との關係並に其間の大法則を知ることを得べく、其順序として、(一)宇宙の現状、(二)太陽系の現状並に起原、(三)地球の現状、起原並に歴史、(四)物質の起原並に進化、(五)生物の現状、起原並に進化、(六)人類の現状、起原並に進化を知らざるべからず、以下其梗概を敘述せん。

## 三

(一)宇宙の現状 廣大無邊なる宇宙並に無數の星辰に就き、組織的研究を爲すは天文學なる最古の科學にして、其起原は五千年以前なりと云ふ。最初は肉眼を以て星辰を観測せしに過ぎざりしも、漸く十六世紀に至り初めて望遠鏡を用ひ、更に近世に及んで望遠鏡の視力は増進し、加ふるに分光器の應用並に天

體寫眞術の成功により、更に長足の進歩を爲し、多數星辰の發見、星體の大きさ、距離、組成物質の成分、元素、星體運動の方向、速力等を知ることを得るに至り、星の数は約二十億と推算せられ、此多數の星は悉く太陽と同様に赫燃し、絶大の光輝を發する恒星にして、其中地球に最も近き「アルファ、ケンタウルス」と稱する星にても、其距離約三十億萬里あり、遠き星に至りては、今日の人智を以て其距離を算出すること不可能なる程遠方に在りと云ふ。各星の光力は太陽の千分の一乃至百分の一を有するものあり、又太陽の數千乃至數十萬倍の光度を有する大星ありと云ふ。又星系の種類として變光星、聯星、星團、星群、星雲、及び銀河等に區別す、而して變光星とは或る星の光を精確に觀測するに當り、一定の期間其光力に強弱の差を生ずるものにして、其數三百三十個あり、其變光する理由は先づ一個の主星即ち太陽とも見るべき恒星が、其の星系の中心に位し、此の周圍を暗星即ち自己に光輝を發せざる我が地球に類似

したる星が廻轉するに當り、主星の光輝を遮り、吾人に其光力を弱く見せ、其點を通過し終れる後、再び主星固有の光力を回復するものなりと、而して斯かる星系が天體に在るは、我が太陽系生成の起因を説明し、且又太陽系類似の星系が、尙多數宇宙間に存在することを暗示するものと云ふを得ん。

聯星は一に雙星と云ふ、近世天文學の發見中、極めて趣味ある發見の一に數へらる、滿天に輝く個個の星を望遠鏡にて注視するに當り、孤立した一個の星と見へる多數の星の中にて、二個或は稀に三個の星が互に相接近し一個の星と見へるもの比較的多數あり、斯かる星系は恰も我が太陽と諸游星及び其衛星との關係、即ち太陽系に於けると同様の引力關係、換言せばニュートンの引力法則を示すものにして、斯かる星系を現はす星を聯星又は雙星と云ふ。

星團とは恒星が數十乃至數百千相集り一星系を爲すとき、其一團を星團と名付く、秋夕東空に見ゆる「ブライアデス」と稱する星宿は其一例にして、此の

星團は肉眼にて、容易に五個の輝星よりなり居ることを知る、雙眼鏡にては百個許り見へ、大望遠鏡にては四百以上の輝星から成る一星團に見ゆるとの事なり。

星群は數千以上の多數恒星が、大規模に大集團を形成する星系なり、例へば人馬星坐ケンタウルスの「オメガ、ケンタウリ」の如き、之を組成する星數は六千と算せられ、他の學者は一萬以上なりと云ふ、星團と云ひ星群と云ふも、明確の區別あるにあらず、只だ之を形成する星の多寡により分類したる便法に過ぎず。

星雲とは星體物質より成る雲霧の如くに見ゆる集合光體にして、其集合状態を強度の望遠鏡にて觀るときは、雲霧狀即ち瓦斯體の如く見ゆるものあり、又大小雜多の星體即ち微游星（隕石）等が無秩序に集合し、互に相牽引し、複雑なる運動を爲しつゝ、大團塊を成して活動するものあり、又更に瓦斯體と微游星と混交して居る如く見ゆるものありと云ふ、而して其形體により種々の區別あ

り。

「オリオン」星座の大星雲は、無定形の大星雲にして、混沌たる多數星體及び氣狀物の大集合體なり。其中には全天中最も著しき星團あり、該星團は六個の恒星より成り、各星とも我太陽に比すべき恒星にして、即ち六個の太陽が星雲に包まれ、該星雲の重量(質量)に付き、ランヤードはあらゆる既知の材料によつて最小限に計算するも、我が太陽(地球の百三十萬倍)の四百五十萬倍ありと云ふ。

「アンドロメダ」大星雲は、楕圓形に見ゆる大渦狀星雲にして、其直徑は十九萬〇三百三十億萬里ありと云ふにより、地球と太陽との距離(三千八百〇六萬六千里)に比し五十萬倍あり、又太陽系全體の直徑(約二十三億萬里)の八千三百三十三倍あり、以て如何に其大なるかを推知することを得、而してロバアツ博士の撮影したる該星雲中には、大小千個以上の恒星を包有し、又米國天文學

の大家ヤング氏に依れば、該星雲中に千八百八十五個の大なる恒星ありと云ふ、斯かる星雲の天界に存在するは、實に驚くべき現象なり。

銀河は無數小星の群集せる大々集團にして、此集團の内外には、大小多數の恒星あり、變光星、星團及び星雲等種々の形體のものあり、而して此銀河が如何に大にして、又全天の如何なる位置を占め、如何なる形狀を有するかと云ふに、今日天文學者の通説とも云ふべきものは、先づ全體より見て天體を取巻く不規則な環帶説なり、米國の天文大家ニューコム教授は、宇宙の境界をゴム球の如き球面と假定し、星辰雲集の銀河は、此天球を取巻ける帶にして、我が太陽系は此銀河環帶の中心、又は其附近に在る星群に屬す。詳言せば太陽系は天球の中心に近く位置を占むるを以て、天球を周回する帶即ち銀河の方面を地球より見れば、星辰の雲集せる銀河を見、又之に直角なる上下の兩半球を見れば、銀河に屬せぬ星辰の疎に配在するを見ると云ふ。

(二)太陽系の現状並に起原 太陽系とは宇宙星辰界に於て、我が地球の屬する一の星系なり、此星系の主星としては直徑三十五萬五千餘里、又容積に於て地球の百三十萬倍なる一個の恒星即ち太陽を有し、更に之を中心として其周圍を回轉する八個の游星と、八百の小游星にて組織せられ、且客星として現はるゝ數多の彗星及び流星を加ふる一團體の星系を云ふ。

游星とは太陽に引かれつゝ其周圍を回轉して、其光を受け反射して輝く所の太陽所屬の暗星にして、自から光輝を發せざるものなり。而して八個の游星とは直徑三萬五千四十餘里の木星を最大とし、直徑千二百四十里の水星を最小とし、太陽に最も近きものより順次其名を擧ぐれば、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星及び海王星なり。之を最小なる大きさに從ひ算ふるときは、水星、火星、金星、地球、天王星、海王星及び木星なり、而して其中水星、金星、地球及び火星の四星は地球性游星と稱せられ、全く無光の暗黒星なるも、

木星、土星、天王星、海王星の四星は大游星と稱せられ、暗黒色なるも多少の微光を發す、即ち四游星の如く未だ充分に冷却して地塊とならざるものなりと云ふ。又水星及び金星の外他の六游星は、各自に一個乃至十個の衛星を持ち、其衛星の數は總計二十七發見せらる、而して八百の小游星は、火星及び木星の兩軌道の中間に散在し、他游星の如く太陽の周圍を規則正しく回轉し居ると云ふ。

太陽は直徑三十五萬五千二百二十四里ありと云へば、地球の直徑三千二百四十五里、九七の九倍に當り、其周圍百〇六萬五千六百七十二里ありと云へば、一時間六十哩(二十四里)の急行列車に乗じて一周せんに、七年九ヶ月餘を要すべし。

太陽の全表面中に黒斑點あることは、望遠鏡の發明後間もなく、十七世紀の初め、伊國天文學者カリシオに依て發見せられたるものにして、大小種々あ

り、直徑六百里位のものあり、又其大なるものは二萬乃至四、五萬里のものあり、此斑點の増加は太陽を漸次死滅の運命に導くものにして、太陽の死滅以前に、地球の死滅あり、地球の死滅以前に、吾人人類の死滅あるべき順序なりといふ。

斑點の附近及び太陽全體の周邊に、著しく白色に輝く浮光と稱する部分あり、此の部分は光層と稱へられ、光熱の盛んなる所にして、此の光層の外部約二百里前後の薄き氣體の層を變復層と云ひ、更に其外部には、水素「ヘリウム」の如き元素物質を主成分として、赤色に見ゆる厚さ二千里乃至四千里の氣體層なる赤層あり、此の赤層より驚くべき紅焰を迸出す、其高さ往々十數萬里に達し、其迸出の昇速力は、一秒時に二千里を超ゆることありと云ふ、而して此の紅焰中には、金屬蒸氣殊に「カルシウム」の存在が認められ、此の紅焰に二種あり、其一は噴煙にして水素を主とし、「ヘリウム」と「カルシウム」とを含む

瓦斯體なり、他は爆發物を出すものにして、多くの礦物を含む、即ち現今分光器の説明に依れば、其物質の大部分は水素にして、其他は太陽元素と稱する「ヘリウム」「カルシウム」が常在し、又鐵、「マンガネウム」、「マグネシウム」、「ライタニウム」及び炭素等三十餘種の金屬元素も屢々認められ、尙ほ又金、水銀、及び白金等十二元素の存在も推定せらる、斯くて現今地球上に知らるゝ約九十元素の半數位は太陽面に發見され、此等元素中には、地殼の硬部を構成する物質の成分なる諸元素を含む、斯くの如く我が地球上の諸元素が、太陽中に見出さると云ふ事は、兩者の關係を精確に説明せんとする證據なりと云ふべし、而して太陽體の實質は氣體即ち瓦斯體にして、其幾部分が液化して居るものと推測せらる。

太陽が絶へず莫大の光熱を四方に放射するは眼前の事實にして、其光力の強大なることは、満月の光に比して六十萬倍あり、熱度は白金に電氣を通じて得

る白熱以上のものと知られ、其光層面に於て六七千度に近き温度なりと測定せらる。

太陽は地球に對し自ら西より東に回轉即ち自轉し、此の一回の自轉に二十五日三八を要す、然るに近時天文學者の觀測によれば、太陽は自轉の外に大なる速力を以て、織女星附近に向つて前進即ち公轉しつゝありと云ふ、換言せば太陽は一秒間に五里即ち一晝夜四十三萬二千里の速力を以て、八個の大游星と八百個の小游星を引き連れ、天界を運行しつゝありと云ふ、果して然らば實に驚倒すべき現象なりと云はざるを得ず。昔は地球が動かず、太陽の動くことを主張したるに、後には地球が動き、太陽は不動なりと説き、今に至つては兩者共に運行すと云ふにあればなり。(以上の趣旨は木村農學士著「自然科學と人生問題」に據る)

晴夜庭前に佇立し、満天の星辰を仰瞻し、我が偉大なる太陽と同性質なる二十億の恒星が此の中に散在せることを憶へば、轉た無限の感に勝へざるなり。

斯くの如く廣大無邊なる宇宙に比すれば、我が太陽系は一小星系に過ぎずして、宇宙の一隅に如何にして發生せしや、今日多數の學者に注意せらるゝ所の説は、先づ唯一の説と云ふて可ならん、即ち微游星星雲説殊に渦狀星星雲説なり、前説はシカゴ大學の地質學教授チャンパーレン氏、後説は同大學の天文學教授モルトン氏の唱道にかかり、兩説相合して星雲を説明し、太陽の起原を解釋せんと試みるものにして、斯説によれば、太陽系の昔は、現今目撃する「アンドロメダ」大星雲の如き渦狀星雲（モルトン説）が漸次に冷却し分化して、今日の太陽系を現出せしものならんと云ひ、太陽系が幾億萬年の昔、星雲状態でありし時、該星雲を構成する無數の冷たき微游星群（チャンパーレン説）が、現今も天界に見ゆる所の星雲に於けるが如く、微游星相互に牽引して衝突を來し、以て大は小を併合し更に大となり、益々渦狀の回轉を繼續し、斯の如き併合現象即ち微游星の引力による衝突が、激烈なる高熱と強光とを起し、漸次其



全星雲體の中心に最大の高熱氣球(太陽)を生じ、其雲體殘餘の部分も、同様な衝突併合の結果、數多の比較的小なる光熱を有する火球(游星)を生ずるに至り、然かも此等の火球は尙自ら回轉(自轉)しつゝ、中央に回轉する大火球(太陽)に牽引せられて、其周圍を回轉(公轉)しつゝ、一同漸次に冷却し來り、其中央の一大火球は即ち今日の太陽となり。小火球は各自冷却の度を異にして、八個の游星と八百の小游星となり、更に六個の小火球の周圍に生ぜし小々火球は、其小體なるだけ早く冷却して、月をはじめ二十六個の衛星を見るに至り、茲に初めて太陽系の幹部が成立し、又此の成立の途中に於て、他の恒星より來りしものか、或は太陽系形成の餘塵より成りしものかと云はるゝ彗星を加へ、更に其彗星又は游星殊に地球の破片ならんと云はるゝ流星を加へ、以て全太陽系を構成するに至りしものなるべしと云ふ。(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

(三)地球の現状並に歴史 地球は赤道の直徑三千二百四十七里餘、周圍一萬

○二百○三里餘、容積百七十八億立方里の岩石塊と水とより成り。内部は恐らく一大金屬にして、鐵に富むと云ふ、而して岩石たる地殼の厚さは、最近瑞典國の物理學者アレニウスの説によれば、約十里乃至十五里ならんとの事なり。

地球の表面は陸と海並に空氣より成り、陸を一とすれば海は二、五七の割合なり、而して地球の表面に生ずる現象中、風雨、生物の發育、人類の生活等は如何なる原因によるかと云ふに、其主因は太陽の存在によると云ふて可ならん、即ち陽熱ありて風を起し、水蒸氣を生じて雨と爲し、又兩者共働して風雨となる、而して日光を受け、又雨より水分を得て、植物茲に生育し、動物を蕃殖する等悉く太陽の作用に依らざるものなく、太陽なくんば此等の現象を地球上に見ることは絶體に不可能なりと云ふて可なり。

次に地球の表面に行はるる重要なる現象は、潮汐の満干なり、其原因は地球に近き月の引力が六分、遠き太陽の引力が四分と云ふ割合にて、地球面の海水

を引付ける爲めにして、月は毎日五十分間づつ後れて地球面を經過し、此の月に面した方の海は満潮となり、其反對の地球面の海は干潮となる、而して此の月と太陽とが協力して引き付くときは、一日の潮に大満潮及び大干潮即ち大潮を生ず。

地球の表面は陸界と氣界とより成立し、氣界は其最外層とす、而して地球上の氣界を成す大氣は空氣なり、空氣は元來無色透明なるも、仰いで晴空を望めば碧茫茫たり、無色の空氣が何故碧色を呈するや、是れ空中に微細なる固體、又は液體の小粒が存在し、太陽の青色光線をのみ反射せしむるが爲めなり。而して空氣の成分は、窒素四と酸素一の割合を以て混合し、之に極めて少量の炭酸瓦斯、水分、「アルゴン」<sup>Argon</sup>、「ヘリウム」<sup>Helium</sup>等を混じ、其中の水分と炭酸瓦斯とは、太陽より來る光熱を通過せしむるも、更に地球より空中に放射する所謂輻射熱は之を吸收する。

地球の放射する熱を輻射熱と稱し、之を空氣中に吸收するが故に、茲に氣溫を生ず。通常吾人が暑い寒いと云ふ溫度は、主として此の熱の多少により感ずる地表の溫度に就てのことなり、其の氣溫が高ければ、生物の發育を助け、又岩石の侵蝕作用も行はれ易し、而して人間の生活し得る溫度は、最低華氏零下四十乃至五十八度、最高百八十度以内とす。

地球表面の氣層は、四十里の高所に達し、陸界の最高頂は二萬九千尺のヒマラヤ山エヴェレスト高峰にして、水界の最深底は三萬二千二百七十四尺のフィリッピン濠あり、(太平洋マリアナ群島とフィリッピン群島との間に在り)一年間に二千二百萬億石の水は雨雪となり、絶へず循環し、其循環の途中に於て地表を破壊し、更に又建設作用を營む、而して内部には數千度或は十萬度とも云はるる地熱を以て噴火し、溫泉を迸出し、地震を起し、空氣は直接生物生命の與奪權を有するのみならず、雲を起し、雨雪を翻し、海水を搖盪して波浪を捲

起し、常に破壊と建設の作用を営む。而して無数の生物は、此の間に在りて新陳代謝す、之を地球の現状とす。

地球は約二十四時間に、一回轉即ち自轉を爲し、茲に一晝夜を生じ、一秒時間にて七里四の速力にて軌道を稍楕圓形に運行す、之を公轉と云ふ。地球と太陽との距離は、平均三千八百〇六萬六千里にして、十二月下旬に最も太陽に近づき、六月下旬に最も遠く離る、此の運行によつて四季を生じ、四年に一回一日の閏日を補充し太陽暦を恪守す。

地球の起原は、太陽系の起原と同じく、其冷却して地殻を生ずるに及び、全然暗星となり、次で噴火を開始し、微游星の陥没により、漸次増大したるものにして、噴火に依り噴出されし物は、内部の高熱なる熔液と、瓦斯體にして、其瓦斯體が地球の表面に出で、地球を包圍する大氣の一部として空氣を生ずるに至り、且星雲體を離るる際に、持ち來りたる空氣等、外部より來りたるもの

も、相合したるものならんとの事なり。

次に地球の内部には、水蒸氣が存在し居り、噴火口より地表に噴出して空氣中に含まるゝに至り、又其後地中の水蒸氣が、地殼岩石の間隙を通過し、比較的低温度の岩石に接觸し、初めて水となつたものが、地表に出で湖水と爲り、溢れて川ともなり、更に多くの湖水が集合して海となりたるものならん、斯く水が多くなりたる時、蒸發して空中の水蒸氣が増加し、茲に最初の雨を見たるならんと云ふ。(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

(四)物質の起原並に進化 吾人の身體並に他の動植物、所謂生物體を構成する物質は、固より悉く地球上に現存する物質にして、地球上は生物の外に諸礦物多く、約二十五萬の全く異なりたる種類の化合物を有し、此等の化合物は約九十の元素が種々様々に化合して生じたるものなり。而して此等の元素中には、金又は銅鐵金剛石(炭素)の如く、他元素と化合せずして存在するものあ

り、多くの元素は他元素の一種又は數種と化合し居るを常とす、其の最も複雑なるものは、生物體を構成し、基礎物質と稱する原形質なり。

二十五萬の化合物は、最初如何にして此の地球上に生ぜしや、即ち地球の原始時代より存在せしものなるや、將又地球の發達數十億萬年間に進化發現せしものなるや、此の答に關しては、多數の學者間に一致を見、恐らく唯だ一説となるべし、即ち物質の起原は、遠く地球發生の原始時代に於て、母星雲より分離したるものにして、此の物質を本とし、爾來隕石又は微游星が來り、陷沒するによりて更に増加し、地球が漸次冷縮するに隨つて、原始狀態の簡單なる物質より漸次益々複雑なる物質に進化し、以て現時に至りたるものなりと云ふ、是れ所謂物質進化説なり。米國のダンカン教授の説に依れば、凡て物質が此所に存在すと云ふは、畢竟宇宙間到處に遍在する「エーテル」の中に、包含せらるゝ陰電氣の單位即ち陰電子が、其所に表現するものにして、而して此等の

單位なるものは、條件附のものなり、蓋し物體が存在すると云ふことを更に詳しく説けば、其陰電子が活動し、該電子を包含する「エーテル」の一局部が運動し出したるとき、其所に物質として認むべきものが現はれ、其存在を見るものなり、而して又其「エーテル」運動は、陰電氣單位の速力によりて差を生じ、隨て物質も異つて來る、扱て此の眼に見えぬ陰電子が愈々目に見える物體となるには、此等の(一)陰電子が先づ第一に物質としての最初の性質を配與され、(二)微原子となり、其微原子が色々の群集となり、又は様々の配合の下に諸種の化學的(三)原子を形成し、此の原子の中に驚くべき力を含蓄するに至り、且つ微力なる化合力即ち引力を有するに至る、而して此等の原子が大集合を成して星雲の状態となり、漸次展開し微力なる化合によりて、炎々と輝く太陽星にまで冷縮し、夫れより此等の太陽星が漸々溫度を失ふと同時に、次第に複雑を加へて、原子は(四)分子に變化發達し、茲に一世界を形成する物質となるに至

れり、斯くして其分子が、此の地球の次第に冷却するに従ひ、先づ(五)簡單な無機化合物を爲し、其れより漸次比較的(六)單純なる有機化合物となり、終に(七)複雑なる有機化合物を生じたるならん、而して更に又此等の有機化合物が、(八)最も簡單なる生物を形成し、此等の生物が無数の異なる形態に進化發達し、永い年月の後遂に吾等(九)人類にまで、進化したることを知るに足ると云ふに在り。而して原子より出來て居るものが、種々なる元素として現はれ居るものにして、即ち元素とは物質の性質(金又は鐵)を意味し、原子とは物質を構成する小物質個體、即ち形態又は數量を云ふ。

(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

(五)生物の現状起原並に進化 生物就中動物界の一斑は、本書の冒頭に略述せり、而して植物中には、多數の細菌の如き、千倍前後に擴大せざれば見ること能はざる微細植物あり、然るに其大なるものに至つては、高さ四百尺に達す

る米國加州産の「シヤイアント」及び「アンモス」樹あり。

地球上に生活する動植物は、千態萬狀なりと雖も、其各個體が(一)生きて居ること、即ち生命を有すること、(二)生きんとすること、即ち生命の持續、(三)其生物を形成する基礎が、原形質なること、(四)其生物體構造の様式が、細胞より成ることは動植物に共通なり、而して此等生物の間には、常に生存競争が起り、其中の適者が生存するものなり。

生物の起原に付いては兩説あり、元來生命なき死物たる地球上に在つて、進化し來りし同一死物の無生物より、生物が発生したるものなるか、將た又地球以外にある他の世界に先住し居りたる生物が、此の地球上に飛來したるものなるかと云ふに在りて、内外二個の起原説あり。若し地球上の無生物より、生物が生じたるものとせば、内説となるも、之に反して生命は生命より來ると云ふ論斷になれば、勢ひ他の世界より來りたりと云ふ、外説にならざるを得ず、蓋し

右の論斷に従ふときは、生物生命の原因を、死せる地球に求むるを得ざるが爲めなり。何れにするも地球の起原と同時に、生物が生じたるものにあらずして、先づ地球が起りて後、其の發達の或る時代に於て、生物が始めて發生したるものならんと云ふは、何人も之を疑ふ餘地なし。故に問題は其の最初の生物が、何所から如何なる方法によりて、發見したりやと云ふにあり、而して發生の時代に就ては、地球表面の熱度が冷却し、生物體の主成分なる原形質の存在を害せざる頃ならんかと云ふ。

生物外來説並に内生説は、幾多の學者に依り種々論議せらる、而して蛋白集成説が有力なるが如し、即ち今日までの科學殊に物理科學の進歩より見て、大體地球外からにあらず、地球上に持ち合せの無機物を以て、地球の漸々冷却しつつある或る適當の時期に、化合成及び重合の作用によりて有機物を生じ、次いで漸々複雑を極むる蛋白質を生じ、然る後始めて原形質を見るに至り、生

物の形體を生ずるの順序に至りしものならんと云ふ。

(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

之に就き永井博士は曰く、生物進化の跡を観察するときには、生物は自然的又は超自然的の理法に依り、無生物より突如として變化し來りたるものにはあらで、生命なき物質より、先づ生物と無生物との中間に位すべき物質を生じ、更に進みて「生」なる語を冠し得べき凡ての特徴を具備せる物質にまで徐々に變遷せしものと考へざるべからず、されば吾人は生命起原の研究に際しては、無機物より有機物に、無生物より生物に卒然一躍すべき希望を廢して、須らく無機物より有機物に變化するに際し、所謂生活體と呼ぶべき物質に到達するまでには、漸次其構成に於て複雑の度を増したる階段を、徐々に經過し來りしことを思はざるべからずと。(同博士著生命論)

生物の進化に就ては、千八百五十九年有名なるダーウキンが、種原論なる著書によりて、進化の事實と其説明とを發表せし以來、解剖學、發生學、化石學

を初め、分類學並に動物分布等の諸方面に於ける事實の研究となり、其の結果生物進化の事實は、學者間に確認せらるるに至れり。

生物の進化とは、最初最も簡單即ち下等なる生物が、永き年月を経て、自然法により漸次系統を絶つことなく、複雑即ち高等なる生物となりたることを示す理法なり。

進化の証據は、大體に於てヘッケル教授の所謂進化の三証、即ち解剖學、發生學、及び古生物學（化石學）の三大方面より比較研究し、且生物の分類並に分布等の諸方面より証明せらる。先づ解剖上の説明を擧げんに、哺乳類は俗に獸類と云ひ、人類を靈長として七千種の動物を有す、其中に麒麟の如き長頸のものあり、豚の如き短頸、又は鯨の如く全く無頸と思はるるものあり、然るに鯨も豚も麒麟と等しく頸の骨即ち頸椎骨は七個あり、必要上より云へば、鯨は無骨にても差支なかるべく、豚は七個の代りに、五個か四個の方便ならん、

之に反し麒麟は七個の代りに、其二倍ありても過多ならざるべし、然るに此等の三種のみならず、七千種の種々なる哺乳類の諸動物が、其頸骨數悉く七個と一定せられてある動物界の一大現象は、蓋し哺乳類全部が、其の當初種類も今日の如く多からざる時代に於て、其祖先に七個の頸骨を有する動物あり、凡ての哺乳類が、斯かる祖先より此の七個の通性を遺傳し、今日に進化せるもの、換言せば今日の哺乳類全體は、斯かる七個の頸骨を有する動物を、共同の祖先として生れ、爾來各方面に進化せしものならんと云ふ。

又發生學上進化の証據として、全脊椎動物五綱に亘る大群、四萬七千二百種の動物に於ける發生當初の形態にして、殊に其の胎兒に鰓孔を有することはなり、鰓孔とは魚類の頭側左右にある水の交通する開孔を云ふ、鰓孔は魚類にとりて、必要缺く可からざる器官にして、此の鰓には血管が通じ、此所で酸素と碳酸瓦斯の交換が行はるるものなり、而して兩棲動物、爬蟲類、鳥類及び哺乳

類の豚、兎、猿、並に人類に至るまで、何れも其最初胎兒の相類似し居るのみならず、皆同様に鰓孔を有することは、此等脊椎動物の總祖先が、凡て水棲生活を爲せしものにして、其共同の祖先より五大方面、即ち魚類、兩棲類、爬蟲類、鳥類、及び哺乳類の四万七千二百種に進化せしものならんと、推測すべき確實なる暗示として、一般に知らるる實例なり、何となれば同じ親より生れたるが故に、兄弟は互に相似るものにして、五大群の動物は、畢竟同一祖先より、其の五大兄弟群に進化したるものと見做すべきものなりと云ふに在り。

化石學上進化の證據としては、異なりたる地層より發見せられたる貝類の化石にして、各地層により夥しく其種類を異にす、而して此等の化石貝類は、殆んど現今生活し居る貝類と其種類を異にし、昔の貝類より現今多數種類の新貝類に進化したるものにして、斯く種類が絶へず年月と共に變化し、一定し居らざることを証するものなりと云ふ。

化石中最も有名なるものの一として知らるゝは、鳥類の先驅者とも云ふべき始祖鳥なり、其化石は二個獨逸にて發見せらる、其身長八九寸尾羽を合して一尺二三寸位に過ぎず、其形体の大体は鳥にして、羽毛により覆はれ、頭部は蜥蜴に似て齒あり、(現今の鳥類には齒を有するものなし)前肢羽翼には指あり、又尾羽は今日の鳥と其趣きを異にし、蜥蜴の如く尾椎骨の長く連結し居るものに、尾羽を持ち居れりと云ふ珍動物にして、實に蜥蜴と鳥との混合動物と云ふべき不思議の体構を有するものなりと。之に依れば現今の鳥類は、蛇や蜥蜴等を含む現時の爬蟲類の祖先より進化したるもの、即ち鳥類と爬蟲類は、共同の祖先を有したることを証明するに足るものなりとの事なり。

生物學者が、生物例へば動物を種々に分類するに當り、或る動物は甲の部類に屬し、全時に乙の部類にも屬するが如き身体の構造并に習性を有するものあり、斯かる動物は、分類學者をして分類に困難を感せしむ、其著しき一例は、



阿弗利加に産する角馬ヌーと稱する動物あり、頭に角を有する点は寧ろ牛に類似し、頭に鬣を有すると其胴体とは先づ馬に類し、前後の四肢は鹿又は羚羊に類似すと云ふ、所謂「牛頭馬体鹿脚」とも云ふべき怪獸にして、其性質の珍奇なることは、極めて短氣にして常に怒り居ると云ふ、斯かる動物は甲乙兩部類の中間動物、即ち兩群を連結する動物にして、甲乙兩群動物が、全然異なるものにあらざることを証するのみならず、却つて密接の關係を示すに足るものなり。

生物分布上より進化を説明する一例は、濠洲の一大特産動物として世人の知る如く、「カンガル」の如き哺乳有袋類にして、亞細亞大陸方面に於ては哺乳類と云ふも、中には熊あり狼あり鼠あり、濠洲に於て此等に相當する動物は、皆其腹部に袋又は袋の痕跡を有す、其袋の著しきものが「カンガル」即ち袋鼠として特に知らるるものなり。然るに印度地方の化石に依つて見れば、昔「カン

ガル」が居りたることを知るに足る、斯かる事實を地質學の上より考ふれば、中古界の時代までの全世界に於ける哺乳類は、「カンガル」の如き有袋類のみにして、同時に亞細亞と濠洲と大陸續きなりしことを推知するに足る、而して其兩大陸の分離後に、大陸方面に於ては、廣大なる活舞台の激烈なる生存競争場裡に、種々雑多なる動物が進化發展したるに拘らず、一方濠洲なる比較的狭き舞台にては、生存競争も激しからず、従つて袋を有するままにて多少進化したる動物を見るに至りたるものならんと云ふ。(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

(六)人類の現状、起原并に進化 世界の人類は總計約十五億にして、氣候風土を異にする地球の各方面に住居し、全地球の百分の八十八を踏破して、人跡の到らざる部分は、僅に残り百分の十二に過ぎず、而して全地球の表面に於て、面積の割合に棲息する人間數の最も多數なる部分は熱帶地方にして、次は亞熱帶、溫帶、寒帶と云ふ順序にして、動植物分布の自然狀況と一致す。此の十五

億の人類は、毛髮、鼻形、皮膚の色、風俗、言語、文學、習慣等を異にし、此等の狀況并に其由來等を標準とし、更に地球上の分布を参照すると云ふ方法、即ち所謂人種學より分類するときは五大別となり、更に小別せば五十種となる、即ち第一は亞細亞系統の民族にして、其數約七億九千六百万人あり、第二は歐羅巴亞弗利加系統の民族にして、其數三億三千九百万人あり、第三は亞米利加系統民族にして、其數一億一千三百万人あり、第四は南方亞弗利加系統の民族にして、所謂黑人種を含むもの一億八千七百万人あり、第五は海岸島嶼民族にして、其數四千二百万人あり、之は南洋人と稱する人種にして、濠洲土人を含む、而して日本及び朝鮮人は、亞細亞系統の民族中、シベリア部に屬する蒙古人韃靼人と其部類を共にし、アイヌ種族は其系統所屬未だ確定せず、大体に於て亞細亞人にあらずして、歐洲人なりとする學者ありと云ふ。

人類には文明と野蠻との別あり、貧富賢愚の別あり、而して其間には生物界に行はると等しく、盛んに生存競争が行はる。

人類の起原に就ては、往古より他生物と異なり神により創造せられたるものにして、變化又は進化せしものにあらずとの説あるも、現在大多數の學者は進化説を主張し、人類も他の生物の如く進化し來りたるものにして、決して不變のものにあらず、而して最初は人類にあらずる他動物より進化したるものなりと云ひ、人類の祖先は一種類の動物にあらず、多種類ならんと云ふ、即ち多原論あり。又祖先は一種類ならんと云ふ一原論ありて、今日多數學者の信ずる所は大體一原論なり、又假に一原とするも、其祖先は某夫妻と云ふ一對の動物より發生せしもの即ち一祖なるか、又は其祖先動物が何某夫妻以外に、各所に棲息し居りたる同類より一樣に發生せしもの、即ち多祖なるかと云ふ二説あり。而して人類の祖先は一對の兩親にあらずして一對以上ならんも、其動物は一種なりと云ふ、要するに人類の發生に關する學説は、一原多祖の進化説に歸着す

るものなり。

人類の發生期如何に付ては、地球發育史中近代の第三期即ち最新世にして、約二十五万年以前の大古ならんとの事なり、之れ彼の有名なる直立類人猿の遺骨が、此の時期の地層中より發見せられたるに依り證明せらるると云ふ。且つ人類の發生地は、現今亞細亞東南部ジャバ島附近なりとの事に略一致し居れりと云ふ。

人類の進化に就ては、唯一の原人説あるのみなり、其原人の起原に就ては、種々の説あるも、多數の學者が事實或は比較的事實に近しと認むるは、デウボア教授の説なり、其説は原始の手長猿より古代類人猿となり、更に直立類人猿なる原人を生じ、次て現時の人類に順次進化したるものなりと云ふに在り。氏は和蘭の軍醫にして、其後アムステルダム大學教授となりたる人にして、千八百九十四年（明治二十七年）、南洋ジャバ島の中央チンデン山の南腹トリエルに近

き所にて、第三期の上層即ち最新世時代の地層なる火山灰の中に、直立類人猿の遺骨が、同時代の哺乳類の遺骨と共に存在したるを、氏によりて發見せられ、明治二十八年和蘭のライデンに開かれたる第三回世界動物學大會に提出し、右遺骨に關し大議論を生じ、此方面の部會に出席したる當時の専門大家十九名の内、五人は類人猿の頭蓋骨なりと結論し、七人は人類なりと決定し、残りの七人は人と猿との中間動物即ち原人なりと論結せりと云ふ。

要するに諸學者の唱道する原人説は、人猿同祖説なり、即ち今日の猿類の祖先と、人類の祖先とは、共同の祖先を有せし時代ありと云ふに在りて、決して今日の如き猿類より人類が進化したりと云ふにあらず。斯かる人猿同祖説の一証としては「フリーデンタール」の血清試験あり、該試験によれば、人間の血清を以て、魚類、兩棲類、爬蟲類、鳥類及び哺乳類に注射するに、人間の血清は此等の動物に對し有害にして、此等動物の血液中なる赤血球を破壊するを見

る、然るに同じ血清を最高等の哺乳類なる類人猿、即ち猩々、黒猩々、手長猿等に注射し見るに、斯かる結果を呈せずと云ふ、換言せば人類と類人猿との關係が、他の何れの動物よりも密接なりと云ふ血清上の証據なりと云ふに在り。而して何れの説も之を追究せば、吾人の祖先は猿に類したる人類即ち原人と云ふに歸着す、又其先は全くの猿類に相違なきも、今日の猿類にはあらず、既に現世に斷絶したる猿類にして、此の猿類は同時に今日の猿類、殊に類人猿の祖先に當ると云ふに依り、茲に人猿同祖説が成立する所以なり、而して此の猿類の祖先は如何と云ふに、猿類にあらざる他の動物なりと云ふを至當とす、即ち人類は動物より進化せしものなりと云ふに歸着すべし。

現今世界の解剖學者の一人たる、獨逸フライブルグ大學のウキデルサイム教授の説によれば、吾人の身体中に百八十個の不用なる器官あり、而して其中の十一個は、魚類にありて有用なる働きを爲し、四個は兩棲類や爬蟲類にあり

て、入用なる器官となり居るものなりと云ふ。今其人体に不用なる器官中の二三の例を擧ぐれば、第一は大脳内部に在る松葉腺なり、之は兩眼球に達する中央の一視神経枝なるが、全く腦体深く内部に隠れ居り、毫も外部に現はるることなし、若し此の器官が充分に發達せば、頭上に一眼を加へ、茲に三ツ目小僧を實現すべき筈なり、然るに今は退化して不用の器官となり、其痕跡を殘存するに過ぎず、是れ其昔或る他の動物に於て、相應に發達し居りたる事を想像せしむるに足る。第二は耳殻と之を動かすべき耳動筋の存在なり、馬や兎は耳殻を自由に動かし、音響の發する方面に向つて耳殻を欹て、其音響を鼓膜に集中せしむるも、吾人の耳殻は一定不動なれば、人類に取りては耳殻は最早不用の器官たり、是等の器官の存在も、曾て之を必要とせし時代の動物より、進化せしことを証するに足る。第三は皮膚の運動筋なり、吾人の皮膚の下には、運動を掌る筋肉あるも、其の皮膚を動かし得るは僅に顔面の皮膚のみにして、喜怒哀

樂を顔面の皮膚運動により表情するを得るも、牛馬の如く全身の皮膚を自由に動かし蠅や蚊を追拂ふを得ず、是れ又運動筋が不用となり退化せしものなり。第四は吾人の身体に尾となるべき尾椎骨の存在なり、其骨片は通常四個稀には五個あり、胎兒六ヶ月の時には、長さ二寸三分位の尾あり、然るに出産時以前に、此の尾が内方に曲がり隠れて、不用の器官となるものなり。第五は人体消化器の小腸より大腸に移る所にある盲腸と、其先端にある蟲様垂（一名蟲狀突起）なる不用器官なり、此の器官は往々疾患に罹る、所謂盲腸炎なるものを起して死亡するものあり、寧ろ有害物ならん、然るに此の器官は、胎兒の時代に稍々發達し居り、他の猿類にては一層發達し、哺乳類の原始獸とも云はるる「カンガル」即ち袋鼠に在りては遙かに發達し、消化器の作用を果し居るものなり、故に吾人は斯る器官を有用とせる動物より、進化せしものなることを証するに足るべしとの事なり。

次に發生上より見るも、人類胎兒の初期は、猿、豚、兎の如き哺乳動物の胎兒に類似するのみならず、鳥類、爬蟲類、兩棲類より魚類の胎兒にまで類似し居ることは、實に人類は勿論此等の脊椎動物全体が、曾て一團となりて共同の祖先を有したることを証明するに足る、殊に胎兒の發生上趣味あることは、人類の胎兒が發育するに隨ひ、漸次鳥類、爬蟲類等の他動物の胎兒と差異を生ずるに拘らず、豚、兎、猿等の胎兒に類似し、更に發育が進むに従ひ、此等動物の胎兒とも異り來つて、猿の胎兒とは其後も末長く同様なる發育状態を繼續す、之れ蓋し猿は人類の兄弟として、他動物よりも一層血縁近く、従つて人類が動物より進化せしものならんと思惟すべき点は、五ヶ月の胎兒が、全身絹の如き纖毛にて覆はるることにして、之れ其祖先の多毛時代を胎内にて証明するものなり。之を要するに人類の生涯は、先づ母胎内にありて、直徑一分の十

五分の一を有する單細胞なる一小卵より始まり、漸次分裂して多細胞となり、種々なる下等動物と同様な形態の様式を示し、遂に生長發達して魚類に等しき時代に至り、尙漸進して猿のある時代に相當する形態を経て、茲に初めて母胎を出て赤兒となり、當初の猿に似たる時代と、原人の時代とを經、更に野蠻未開の人類時代に相應する幼年期を通過し、遂に成人となるものにして、母胎内十ヶ月の短日月を以て、四千万年前初めて地球上に發現せし單細胞なる原生動物の時代、即ち卵より出發し大体に於て四千万年間に於ける生物進化の各時代の様式を示しつゝ、最大急行の速力を以て、人類にまで成長せしものにして、斯かる現象に就き獨逸のヘッケル博士は、「レカピチュラチオン」即ち胚子原系再現説を唱道せり。(木村農學士著自然科學と人生問題に據る)

凡そ以上縷述するが如く、最近に發達したる天文學、地質學、地文學、生物學及び物理科學等の知識に由り、大宇宙に的標として光輝を放つ大小二十億の

恒星と、我が太陽及び地球とは、何れも同一の物質より成るものにして、地球上に存在する總ての生物は勿論、無生物体を構成する基礎物質即ち元素中にも、同一物質を發見する所より之を見れば、現在地球上に生活する十五億の人類も、亦同一の物質より成立し、人類と地球及び地球と星辰とは、互ひに密接の關係を有し、何れも彼我同一なる宇宙引力、及び電力の法則に支配せられるものなることを明かにし、隨つて天地人に共通なる一大法則の存在を証明し得たりと信ず。

孔子の作と稱せらるゝ周易の序卦に曰く、有天地。然後萬物生焉。盈天地之間者。唯萬物。なり又尙書の泰誓に曰く、惟天地。萬物父母。惟人萬物之靈、なり而して人が萬物の靈長たる所以は、荀卿之を詳説して曰く、水火有氣而無生。草木有生而無知。禽獸有知而無義。人有生有氣有知。亦且有義。故最爲天下貴也。力不若牛。走不若馬。而牛馬爲用何也。曰。

人能群。彼不能群也。人何以能群。曰。分。分何以能行。曰。以義。故義以分則和。和則一。一則多力。多方則疆。疆則勝。物。故宮室可得而居也。故序。四時。裁。万物。兼。利天下。無。他故。焉。得。之。分。義。也。(荀子王制篇第九)即ち文明人は他動物に比して、精神的方面に高度の發達を遂げ、宇宙の大道を体得し、理性を受け道德意識を有し、倫理的社會生活を營爲す、此の点に於て人類は万物に卓越し、之れが靈長たる所以なり。然るに犯罪は此の倫理的社會生活に反する現象にして、天道と相容れざる不誠行爲なるが故に、進化の大法則に従ひ、人類の精神的發達に伴ひ、之れが絶滅の日なからざるべからず、然るに世界大戰に際し、偶々現出したる二大罪惡は、此希望を裏切りするを奈何せん。其大罪惡とは何ぞや、一は佛國の占領地内に於て、獨逸軍により演せられたる大蠻行にして、他は西伯利亞の荒野に於て、過激派により行はれたる、前露國廢帝、并に其一家の虐殺事件なりとす、之を聞知し誰か戰慄せざるものなからん。

## 四

大正四年二月中佛國大使館は、暴戾を極めし獨軍の蠻行と題する一書を頒布す、披ひて之を見れば、一時獨軍の爲に占領せられ、後之を回復したる地域に就き、獨軍の蠻行を調査したる報告書にして、其蠻行を宇内に訴へたるものなり。其調査は會計検査院長ジヨルジュ、バイエル氏委員長となり、全權公使、參議院評定官、大審院判事等委員と爲り、實地を調査したる結果を内閣議長に報告したるものに係る、一讀誰か酸鼻せざるものなからん、今其の報告書の一部を斷片的に摘示すれば左の如し。

吾人は從來の開明國間の戰爭中、一として今回の如き執念深き、獨軍の各地に行ひし蠻的性質を帶ぶるものなしと云ふを得べし、掠奪、強姦、放火、殺戮は敵の常習的行動なり、日々暴露せる事實は普通刑法の重罪にして、何れの國

の法典に於ても、嚴重にして且つ極めて不名譽なる刑罰に處せらるべきものなると共に、獨人が千八百七十年以來良心の低下せるを表白するものなり。

婦人處女に對する暴行は、前代未聞の多數なり、吾人は隨分數多の事實を検証したれ共、之を吾人の擧げざる事實の多數に比すれば、九牛の一毛のみ、此種の忌むべき汚行の犠牲者が、一般に之を發表するを拒むの情は、之を諒せざるを得ざるなり、此等被害者の數は、獨軍指揮者たる者、意を此に注がず必ず輕視せしに相違なし。或は此の暴行を以て、個人的獸心の一時の發作に過ぎずと爲す者あるやも知れざれども、放火、強盜、無辜の殺戮に至つては、其指揮官たる者、最高等統帥に至るまで、人道に對し極めて重大の責任を有せざるべからず。

調査委員の一行は、最初にセーヌ、エー、マルヌ縣に入れり、同地に於て獨軍の爲したる慘酷なる蠻行は、九月六日(大正三年)獨逸近衛兵所屬と思はるる一

隊クルタコンの人家一部分を焼き拂ひし後、大人五人十三才の小兒一人を畑中に連れ行き、交戦中彼等を佛軍の砲火に曝したり、同村内に於て一九一四年度の徴兵なるエドモン、ルーソーは、近々入營すべき年齢なりと云ふ廉にて捕はれしが、悲惨なる状態に於て虐殺せられたり、即ち人質中にありし村長は、右青年の身分に關して質問を受け、ルーソーは徴兵検査を受け合格したれども、召集にならずと答へたり、是に於て獨兵は本人を裸体と爲し、身体検査を行ひ、後再び洋袴のみを穿かせ、同郷人より五十「メートル」を隔てし所に於て本人を銃殺せり。

グーロンミエに於ては、市内の婦人數名罪惡行爲の目的物となりし事を一般に言ひ傳ふれども、唯一人の分だけ確証を得たり、即ち被害者は通ひ女中某なり、九月六日午前九時半頃、一名の兵士彼女の許に來りて、その夫に向ひ往來に行きて、己が朋輩の一名を呼び來るべく頼みて夫を遠ざけ、次いで二人の小



兒の面前をも憚らず、若き妻に暴行を加へんとしたり、妻の悲鳴を聞きたる夫は、周章して家に入りしが、小銃の台尻にて打たれ、隣室に追ひ遣られ、其戸の開きたるまゝなる所にて、妻は最後の凌辱を受けたり、是れ殆んど目前にて遂行されたるものなれども、夫は恐怖して干渉し得ず、唯小兒等の恐怖を鎮めんと力めしのみ。

右近村の某氏の娘十八才十五才十三才の三名が、病氣なる母の病床に侍せしところに、獨逸兵二名來りて長女を捉へ、隣室に引摺入れて之を輪姦せり、但し一名が強行を遂ぐる間、他の一名は入口に立番し、銃器を持って狂せる母を近寄らしめざりき。フェルテ、ゴージュの城内に於ける別荘に、驚くべき事件は演ぜられたり、同所には年老いたる一名の隠居某氏、五十四才なる下婢嬢と共に住せしが、九月五日獨逸兵數名下士一名來りて此邸を占領したり。下士は食事を供せしめし後、同所に避難し居りし甲婦人に同衾を申込みたり、彼女之を

拒み隠居某は、彼女の難を救はんが爲め、彼女を近隣にある己が農園に送りたり、然るに獨逸兵又其所に走り行きて彼女を搜し出し、別荘に連れ歸りて物置に導き、次いで全く彼女の衣服を剥ぎ、將に辱しめんとせし際に、隠居は彼女の操を保護せんと欲して、物置の階段にて拳銃を放ちしかば、直ちに兵士より銃殺せられたり。是に於て下士官は甲婦人を物置より出でしめ、強いて老人の死骸を跨がさせて、更に二回兇行を試みしも能はざりければ、遂に彼女を捨て、乙嬢の方に取掛り、甲婦人を二名の兵士に渡したれば、兵士等は死者の室に於て、一名は一回一名は二回彼女を輪姦し、後納屋の中にて彼等の傍に一夜を過ごさせつゝ、其兵士の一名は、其所に於ても猶二回彼女に對し獸行を加へたり、乙嬢は又小銃にて強迫を受け、全然裸体にせられ後蒲團の上にて下士官に姦せられ、徹宵其弄ぶところとなれり。

次に委員等はマルヌ縣に入り、調査したる事實の中、九月六日日曜日より七

日月曜日に掛けての夜中、各所の人家に入りて掠奪を爲す兵卒等、穴藏の階段下に逃げ居りし寡婦ブルエ其娘二人及びロム婦人マセ婦人を發見し、二人の娘に對して脱衣せよと命ぜしが、その母の之を遮らんと試むるを見て、兵卒の一名は銃の狙ひを定めて婦女の集團に向けて發砲せり、銃丸はロム婦人の左肘のわきに中りし後、マルセル、プーシエ嬢の左腕を脇の高さに於て打ち碎きたり、次の日此の女子は其の傷の爲めに死没せり、傷を實見せし人の話によれば、恐しき事見るに堪へざりしと云ふ。

九月七日イトリアン、ベルトアに於ては、四十五才なる甲婦人及び八十九才なる乙婦人が、兩名とも強姦せられ後者は之が爲め十五日を経て死亡せり。ジュスクールミスクールに於ては、九月八日夜九時頃、四名の兵士鎌を以て某嬢の室の戸を破り、室内に乱入して同嬢に暴行を加へ、二十一才なる此の女子を輪姦したり、城壁なき市街の砲撃は、萬國公法違反なること争ふべからざる

ものなるが故に、獨逸人が二十四ヶ日前より續いて砲撃しつつあるレンヌ市を臨檢する必要ありと思惟し、同市に至り市長より非戦闘民約三百名の既に殺されしと云ふ証言を聞きし後、市内數ヶ所に於て、數多の建造物が破壊せられたるを見たるに、大天主堂の破損甚大にして、到底修繕し難きを見届けたり。

ムールト、エー、モゼル縣の慘害中最悲惨事は、ナンシー市外なる某穴倉に若干名の人々を避難せしめたるワツセ氏方に於て發生したり、即ち午後四時頃、約五十名の兵士はワツセ氏方にも來り、門及び窓を毀ちて亂入し放火す、避難者は逃出さんとせしも、その出るに従つて打ち斃さる、眞つ先にマントレーと云ふ男殺され、次に其息レオン其抱き居る八才に奪る妹と倒れしが、即死せざりしを以て、敵は銃尖にて其頭上を壓迫し息の根を止めたり、その次にはキエフェル一家にして、母は腕と肩とに傷けられ、父と十才なる男兒三才なる少女は銃殺せらる、獨兵は彼等の倒れしを見たる後も猶續いて撃ちたり、地に倒れ

たるキエフェルは再び額に一弾を受け、その子は頭綱を撃ち飛ばされたり、その次はストリフェールと云ふ男并にワツセの子一名殺され、マントレー婦人は左脚に一弾左腕に一弾額に第三弾を受けしが、額のは擦過傷に止まりき、ギョームと云ふ男は道路に引出されて殺さる、最終に穴倉より出でしは十七才なるシモナン女及び三才なるその妹は一弾を被りて片臂を殆んど殺ぎ取られたり、郡参事ビエプロ氏は右焼き拂ひ及び殺戮に於て落命せし者の名簿を作りしが、之に死せし者は五十名に下らず、我等は此處に若干名を挙げたるに過ぎずと。嗚呼何んぞ其事の慘憺たるや、茲に摘記し來りて腥風の楮墨を吹くかと思ふ、曾て文化の中心と誇稱せし獨逸民族にして此の蠻行あり、吾人言ふ所を知らず。

露國前廢帝并に其一族が、ウラル山脈の僻地に於て虐殺せられたる件も、亦空前の大悲劇にして、人類の大罪惡なり。其真相は千九百五年以來、露國皇室

の家庭教師として、君側に在りたる瑞西人ビエール、ギリヤール氏により傳へらる、氏は前主人に對する同情心より、其の最後の真相を確かむる爲め、非常なる危難を冒して事實を探究し、其結果を今春初めて「イラストレーテッド・ロンドン、ニュース」に發表し、萬朝報は其手記を抄譯し、大正十年四月四日より十回に亘りて紙上に掲載せり、今其哀史の一部を摘示せん。

千九百十七年三月(大正六年)革命勃發以來五ヶ月間、皇帝一家はアツァールスコエ、セーロに幽閉せらる、其一族は皇帝皇后と、五人の小供たちで、皇太子アレキセイは十三才、長女のオルガは二十二才、次女のタチアナは二十才、三女のマリヤ十八才、四女のアナスタシアは十六才であつたところが、その年の八月、一家は更にトボリスクへ移され、翌千九百十八年五月二十二日、全所よりエカテリンブルグへ移され、イバーチエフの家に監禁せらる。

チエーメンは七月二十日に反過激派の白軍の爲めに攻略せらるるところとな

つたので、その爲め危くも我々もあの氣狂ひ共の犠牲となるところを無事に助かることが出来たのである、それから四五日経つと、此の地の新聞には驚くべき報導が掲げられた、それはエカテリンブルグの街頭に現はれた、過激派の宣言なるもので、「前皇帝ニコラス、ロマノフに對する死刑の宣告は、七月十六日より十七日に亘る夜間に執行され、皇后及び小供等は、安全地域に移送せられたり」。越へて七月二十五日に、エカテリンブルグも終に白軍の手に歸したので、私は交通機關の回復を待つて、それには可なり時間がかつた、ギッブス君と共に皇帝の一族、及び彼地に居残つて居た同僚たちの安否を尋ねる爲め、エカテリンブルグへ向け突進した、そして到着の翌日第一番に、例のイバーチエフの家へ入り、皇帝一族の牢獄であつた部屋々々を、細かに点檢した云々、そこで今度は地下室に下りて行つた、地下室には大部分磔石が敷いてあつた、ひよつとすると皆がそこに死んでゐるのぢやないかと云ふやうな氣がして、怖

しく胸騒ぎがした、部屋の中は見ると怪しむべき光景を呈して居た、光線は鐵格子の窓を通して微に流れ込み、壁や床には彈丸や銃劍の痕が矢たらに印されて居た、あの怖ろしい罪惡が、此の一室で行はれたことは、もう疑ひの余地がなかつた、また殺されたものも一人でなく、大勢であつたことも明白だ。

虐殺前の數分時と題する項を見るに、夜中少し過ぎた頃ヤウロフスキーは、皇帝一家の部屋へはいつて行つた、それには口實があつて、此の地に叛亂が起つた爲め、皆を直ぐに避難させなければならぬ、その支度の出来るまで、階下の部屋の方へ行つて居た方が安全だと云ふのであつた、皇帝一家は直様支度にかゝつた、二三の細々したものや蒲團を抱へて、内側の階段を降りて行つた、その階段は地下室の入口へ出る庭への通路であつた、ヤウロフスキーとニニーリンが先頭に立ち、それから皇帝が皇太子を抱へて續き、皇后皇女たちウオイトキン博士皇后の侍女アンナ、デミイ料理人ハリトノフ從僕ツローブの

順で降りて行つた、下へ降りると、ヤウロフスキーは皆を一室に待たして置いて、直に避難の馬車か自動車が迎へに来るのだと語つた、かれこれ二三分余りもさうして待つて居ると、突然ヤウロフスキーが七人の獨塊俘虜と、二人の間を連れてはいつて來た、その二人は共にトレツツオイチャイカ所屬の死刑執行吏で、委員エルマールコスとウオガーノフとであつた、メドウエーリエフも彼等と一緒にやつて來て居た、するとヤウロフスキーは行きなり皇帝の側へ行つて云つた、お前の味方はお前たちを助けやうとしたが駄目だつた、俺れたちはお前たちを死刑に處さなくつてはならんだ、言下に彼は短銃を引き出して、直様皇帝に發射した、皇帝は一發の下に斃れた、それが全員發射の合圖だつた、一同はそれぞれ相手を選んで射撃した、ヤウロフスキーは皇帝と皇太子を手に掛けた、囚人たちは大底其場で殺されてしまつた、皇太子アレキセフは微かな呻き聲を洩して居たが、ヤウロフスキーは最後の息の根を止めた、皇女

アナスタシアは負傷した丈けであつたので、彼等が側へ近寄つて來た時、叫び聲を擧げて駆け出したが、銃槍で突き殺された、皇后の侍女アンナ、デミードは、座蒲團の陰に隠れて居たので銃丸は免れたが、部屋の隅から隅と逃げ廻つて居る中、とう／＼突き殺されて了まつた。

目撃者の陳述は、此の怖ろしい虐殺の光景を描き出して見せるのであつた、その目撃者は下手人の一人なるポール、メドウエーリエフと、もう一人彼自身は否認して居るが、矢張り悲劇の見物人であつたに違ひないアナトール、ヤキモフとである、それに今一人フリッツ、フラスコーリヤコフは、他の目撃者の陳述によると、此の虐殺とは余程際どい關係があつたものらしい、以上三人はイバーチエフの家の番人であつた、とう／＼虐殺が片付くと、委員共は死体から寶石類を掠奪して、死体を戸外に運び出し、それから擔架に乗せて、庭の入口に置いてあつた板圍のしてある自動車へ運び込んだ。

運搬自動車は漸く目的地の開墾地へ達した、死体は地面へ下されて半裸体にされた、委員たちが澤山な寶石を發見したのは此の時で、皇女たちの着物の下に隠されてあつたのである、彼等はそれを奪ひ取つたけれども、中には地面へ取り落されたものなどもあつた、それから死体はばらばらに切斷されて、大きな火炙りの台に乗せられ、それに「ベンジン」油を灑いで火を点じたのであつた、焼け残つた部分には硫酸が灑がれた、三日三晩の間、彼等は「ヤウロフスキー」と「ユルマーコフ」と「ワガーノフ」の指揮の下に、跡方もなく死体を消滅させて了ふ爲めに忙殺されてゐた、その爲町から此處へ運ばれた硫酸は百七十五「キログラム」に達し、「ベンジン」油は三百「リットル」以上に上つた、仕事は七月二十日まで續いて居た、それが終ると火炙台は取拂ひ、灰は堅坑の中へ投げ込んだり、開墾地一面に撒き散らしたりした、さうして一切の證據を殫滅させようとしたのであつた。

皇帝は死刑の宣告もされず、又裁判も受けず、行成虐殺されたのである、だがそれはそれとして、皇后、皇太子、皇女、ウオトキン博士、それに三人の従者はどうしたのか、彼等が皇帝と一緒に殺されたのは何の爲めか、彼等には何の咎もなかつた筈である。次に氏は開墾地大搜索に依り、數多の遺品、鋸痕ある骨片、六個の「コールセット」焼残りの衣片等の發見に依り、更に事實を確認せり。嗚呼此の手記は滿紙涙痕なり、曾て大露國に君臨し、全世界を睥睨したる大皇帝の尊を以て、一朝其位を失ひ、遂に此の慘禍に逢ふ、此の哀史を讀んで涙の滂沱たるを覺えざらしむ。而して斯かる瘳猛なる慘劇の演出は、人類の殘忍性を証明するものにして、此の二大慘劇は、吾人をして犯罪絶滅の希望を斷念せしむるものにあらざる歟。

## 五

曰く然らず、抑も天道は誠なり愛なり眞なり善なり美なり、而して人類は此

の天道を体得し、道德意識を有するものなるが故に、進化の理法に依れば、將來此の道德意識も亦益々發達すべく、随つて反社會性の動機は、自から抑制せらるるに至り、其結果爭鬪本能蒐集本能の如きも漸次退化すべし、即ち各種の社會政策と相待つて、教育の力に依り個性を改善し、犯罪の内部的原因は、遂に之を消滅せしむるを得ん。

外部的原因、即ち個人と社會との關係の主要なるものは經濟關係にして、將來生存競争は益々激烈となり、貧富の懸隔愈々甚しく、多數の民族は生活の困難を極め、圓滿なる社會生活を期待するを得ざるが如しと雖も、道德意識の發達は、延いて經濟關係を順調ならしむべし。此の點に關し經濟學の大家にして、兼て儒教に造詣深き田島法學博士は、道德と經濟と密接の關係あることを力説し、道德的行爲は善を目的とし、經濟的行爲は利を目的とし、善は必ずしも常に利と合せず、道德と經濟とは往々相背馳することあるが如しと雖ども、

善に大善あり小善あり、利に大利あり小利あり、道德并に經濟の極致は、小善を進めて大善となし、小利を併せて大利と爲すに在り、換言すれば小我を進めて大我となすに在りと云ふ。

生産者兩階級并に一般社會の教育を高め、其道德的并に經濟的理想を進めて、勞力自由の眞意義を覺知せしむべく、勞力自由は社會進化の産物なるが、更に一層社會を進歩せしむる所の積極的大勢力を成して、平等と責任との二條件の下に繋がるものなり、平等なきの自由は強者の壓制なり、責任なきの自由は放縱なり、共に眞の自由に非ず、平等に(一)法律上の平等あり、(二)機會均等あり、(三)相手方間の關係的平等あり、責任に各個人相對間の責任あり、各個人が社會に對する責任あり、前者よりは一層後者を重要とす、即ち企業者は其勞働者に對し、又勞働者は其企業者に對して、責任あるのみならず、彼等は社會公衆に對して一層重大なる責任あり、即ち私益の爲に公益を害せざるの責

任を有し、及び場合に由りては公益の爲には私益を犠牲に供するの責任を有す、此平等と責任との基礎の上に立つ所の自由を、真正なる勞力自由と云ふなり。苟くも世の企業者にして此眞自由を覺知せば、勞働者を虐待酷使するが如き事は其跡を絶ち、産業上に於ける私的獨占に由りて、社會公衆の利益を吸収するが如き事は無かるべく、又世の勞働者にして此眞自由を理解せば、同盟罷業其他の勞働爭議は、之を未然に防ぐを得て、現時の社會問題は容易に解決せらるるべく、而して社會公衆が總て此眞自由を會得せば、縱令社會一部に企業主勞働者の爭議ある場合、又は兩生産階級が苟合比周して、消費者の利益を害する虞ある如き場合に於て、之を和解矯正するを得べきなりと。

博士は又報恩主義なるものを唱ふ、其要に曰く、余思ふに恩に自然の恩あり、父祖の恩あり、社會民衆の恩あり、國家の恩あり、先輩の恩あり、吾人が財を生産し及び交易するに方りては、必ず此等の諸恩を承く、是の故に吾人が

財を分配し及び消費するに方りては、此等の諸恩に報ゆる所なかるべからず。

蓋し現時の文明諸國に於て、借地人が地主に對して實際支拂ふ所の地代は、經濟的地代の外に、利子利潤をも含むべし、即ち地主が地上に投下したる資本の利子、及び土地の管理に要する費用を含むことあるべし、今暫く此等の利子利潤を度外に置き、單に經濟的地代に就いて見るに、地主の之を領收するは、固より自然の恩惠と、國法の保護とに基くは論を俟たずされども、尙看過すべからざるは社會民衆の恩惠是なり、現時文明諸國に於ては、人口は益々増加し、社會は愈々進歩し、經濟は發達するが爲めに、地代は益々騰貴し地價は昂上す、隨つて地主は勞せずして愈々其取得を増加し、其財産を増殖す、都會及び其附近の土地に於て、特に此の趨勢の顯著なるを見る。

夫れ斯くの如く地主は自然の恩、國家の恩及び社會民衆の恩を受くること甚大なるが故に、之が報恩に留意すべきは當然なり、即ち土地（及び其他の自然）



を適當に完全に利用するを勉め、之より生ずる所得は、成るべく多く土地の改良、國家一般經費の負擔、及び社會民衆の公益に齎出することを心掛けざるべからず。國家又は地方團體が、其公共的事業を遂行するが爲に、必要とする土地（又は其他の自然）を收用せんとするに當り、地主（又は其他の自然力の所有者）が之を寄附し、又は相當以下の價格を以て買收するに應ずるは、亦報恩の一端に外ならず、地租、土地増加税、特別賦金の如きは、土地をして直接に國家及び地方團體に報恩せしめ、間接に社會民衆に對して報恩せしむるものなり、而して地主が借地人、小作人に對し、寛大なる條件を以て其土地を使用せしめ、忌むべき社會問題の發生なからしむるは、是れ又地主の直接に社會民衆に對する報恩と謂ふべきなり。

第二社會民衆の恩に就いては、吾人は現時の分業及び交通の盛んに行はるる處に於て之を感じるに甚大なり、夫れ吾人は耕さずして食ひ、或は織らずして衣、築かずして住ひ、陶冶製作せずして、白般の器物を得、坐ながら四方の貨財を享くるを得、勞せずして身を千里の遠きに運ぶを得るは、實に分業及び交通の賜なり。

故に一業に服するものは、他の萬業に服する社會民衆の恩を感じ、故に一勞働者又は一企業者は、他の總ての勞働者及び他の總ての企業者の恩を感じざるを得ず、蓋し社會は一有機體なり、社會を組織する人類は、種々の職務を分掌して、互に相輔くるのみならず、總て社會に隸屬して、社會を進化せしむることに努力す、社會を進化せしむるは、吾人の社會欲にして、即ち社會の意志なり、即ち各個人の意志の綜合ならざるべからず。

企業者全体は、勞働者全体に對して、如何なる方法を以て其合衆的報恩の實を擧ぐ可きかと云ふに、是に直接なる方法と、間接なる方法とあり。間接なる方法とは、企業者全体が富裕階級として、一般慈善事業に出資盡力し、又は國

家の財政特に租税政策に關しては、貧民に偏重となるが如き間接税を捨てて、衡平主義に合する累進的直接税を取ることを賛成するが如きは是なり。直接なる方法とは、或は企業者團體が、合意的に一般労働者優遇の道を講じて、互に之を實行し、或は工場法労働者保護法の如き國家の法律を遵奉して、敢て違背するが如きこと無きは是なり。苟も企業者團體にして、斯くの如き態度に出でんか、謂ゆる「徳に報ゆるに徳を以てす」との金言の如く、労働者團體の企業者團體に對する態度も、亦同様ならざるを得ざるべし、労働時間の短縮は、時間勵行及び周約的労働を以て酬ひられ、労賃の増加は、労働能率の増大を以て報ひらるべし。企業者が労働者に對する彼の如く、労働者が企業者に對する又此の如くなるときは、啻に此等兩階級が互に其恩徳を享くるのみならず、一般社會民衆も亦其利福を受けて、國家の安寧秩序は増進すべし。(田島博士著 經濟と道德)

斯の如くにして道德意識の發達は、民衆の自覺となり、社會經濟の發達と

社會道德の進歩となり、財貨の消費は適當となり、生産は豊富となるべし、而して分配も亦衡平を期するを得ん、随つて犯罪の外部的原因も亦自から消滅するに至らん。

之を要するに天道に背反する社會の現象は永續せず、犯罪は天道に背反する社會現象なり、故に永續すべきものにあらずして、將來必ず絶滅するの日ありと信ず。而して犯罪の消滅は、先づ少年の犯罪より始まり、漸次成年者の犯罪に及ばん、然れども其之を實現せんには、社會共同の繼續的絶大なる努力を要するや言を俟たず、茲に此の大膽なる豫言を以て本書最終の結論とす。(終)

# 少年犯罪論 終

## 索引

ア  
 悪性の固定……………九九  
 壓覺溫覺及び痛覺……………一〇四・一〇五

イ  
 意思の意義……………一四三  
 意思過程……………一四四  
 意思の發達……………一四九  
 飲酒……………二六七

ウ、 ヴ  
 運動と調和……………一四四  
 運動作用……………一六三

運動感覺……………一〇三  
 ヴントのゼームス、ランゲに  
 對する反對說……………一二六  
 ヴントの強弱遲速の區別……………一四二

エ  
 嬰兒期……………一三三  
 延髓と其機能……………一五八  
 嬰兒の表情……………一六一  
 英雄崇拜心と虛榮心の發現……………一七一  
 嬰兒の啼泣……………一七七  
 液體病理說……………一四二  
 鰓……………三九五

カ、ガ

含水炭素……………三六  
 感覺の分類……………一〇〇  
 感覺の結論……………一二四  
 快不快の感情……………一二五  
 快不快の原因……………一二六  
 感情の分類……………一二八  
 簡單感情……………一三〇  
 ガレンの四原液說……………一四一  
 買喰癖……………二六〇  
 觀覽癖……………二六三  
 カンガル(袋鼠)……………三九八

キ、ク

筋肉……………二九

近視眼……………四三  
 休息と睡眠……………四八  
 虚偽……………六七  
 氣質……………一四一  
 氣質の概念分析……………一四一  
 畸形……………二〇九  
 教育状態……………二三四  
 喫煙……………二七一  
 銀河……………三七五

ク

空氣……………三八四

ケ、ケ

幻覺……………一七  
 言語……………六三

劇情者と冷淡者……………一三三  
 血友病……………二二三  
 刑事政策……………二九七  
 元素と原子……………三九〇  
 原人……………四〇二

コ

國民生活……………九  
 光覺と色覺……………一〇七  
 興奮性の過敏者と遲鈍者……………一三三  
 交友關係……………二三八

サ、サ

錯覺……………二  
 殘忍性の發現……………六九

細胞……………一九〇・一九六

シ、ジ

社會意思の表現……………二  
 自然犯罪と人為犯罪……………一九  
 青少年女期……………二三  
 身長と體量の増加定期性……………三五  
 心臟の發育……………三一  
 脂肪及び脂肪様物質……………三六  
 主食物……………三六  
 脂肪體の形成……………三九  
 主我系統と主自然系統……………五三  
 心身相制説と心身並行説……………五四  
 神經系統……………五六  
 小腦と其機能……………五八  
 兒童の直觀……………六六

兒童の記憶	六
蒐集本能と盜心	八三
社交本能と利他的精神	九二
兒童の模倣	九三
視覺	一〇六
色盲	一〇八
嗅覺	一一〇
嗅覺の中和と順應	一一一
嗅覺の作用	一一二
人生の危機	一一五
兒童と美感	一二三
情緒の意義	一二四
情緒の順應と其不調合	一二三
情操	一二四
宗教的情操	一二七
兒童の宗教的意識の發達	一二七

衝動的意思	四
思慮的意思	一四五
衝動性昂進と衝動性不足	一四八
少年(少女)の犯罪	一五七
職業關係	二四七
受刑前の行狀	二五三
少年法案	三〇〇
少年法案に對する反對說と駁論	三〇六
潮の満干	三八三
始祖鳥	三九七
人種	四〇〇
人類の發生期	四〇二
人類の發生地	四〇二
人猿同祖說	四〇三

ス	
角馬	三九八

セ、ゼ

青年處女期	二二
脊髓と脊髓神經	五七
脊髓の機能	五八
生殖本能と戀愛	八五
性慾と犯罪	九〇、二七三
ゼームス、ランゲ說	一二五
生殖細胞	一九二
精蟲	一九二
染色體	一九三
精神方面の遺傳	二二五
生物の變異性	二二七

生育狀態	二二七
性惡說(荀子)	三六二
性無善惡說(告子)	三六三
性善說(孟子)	三六三
性道教(中庸)	三六五
星群	三七三
星雲	三七三
生物の進化	三九四

リ

爭鬭本能	八二
騒音と調音	一〇九

タ、ダ

胎兒期	二三
第二の誕生	二七

蛋白質	三五
蛋白質の形成	三六
大脳皮質と皮質下中樞	五六
多極細胞	五六
大脳の中樞機能	五七
太陽系	三七六
太陽	三七七
チ	
知覺神經と運動神經	五五
忠恕	三六九
地球	三八三
テ	
鐵の作用	三九
聽覺	一〇九

天地之道(中庸)	六
ト、ド	
道德意識の發現	六八
盜心の發現	六九
動機	一四三
糖尿病	二二四
盜癖	二六三
ナ	
男女の身體的差異	四九
男女の精神的差異	一五三
ニ	
ニシヤ	二
肉慾と戀愛	八六

尿崩病	二二四
ノ	
腦の發育	三〇
ハ	
反社會性	一一
犯罪	一一
犯罪人定型說	一四
肺臟の發育	三二
反射運動	七三
犯罪と身體狀態	一六七
犯罪と精神狀態	一七一
白內障及び綠內障	二二三
犯罪の動機	二七八
犯罪の常習性	二八八

胚子原素再現說	四〇八
ヒ、ビ	
疲勞	四七
光に對する感覺	六四
皮膚覺	一〇四
表出運動	一二五
美的情操	一三八
品性と其陶冶	一五一
人之道(中庸)	二六六
フ、フ	
父系法	八
扶養本能と兩親の愛情	九一
複合感情	一二二
不良少年團	二三九

風習關係	二四六
輻射熱	三六五
物質	三六八
變光星	三七二
ホ、ボ	
母系法	七
骨	二八
ホルモン學說	三三
歩行と兩手の使用	六三
本能の定義	七一
本能と反射運動との差異	七三
本能の一時性	七四
本能の定期性	七五

本能の早期特化性	七五
本能の種類	七六
模倣と社會遺傳	九二
本能の調節	九五
本能の教化訓練と社會適應性	九五
本能と情緒の關係	一三八
報恩主義	四三八
ミ	
民族	九
水の必要	三七
水と鹽との關係	三七
味覺	一二
味覺の中和と對比	一二

メンデル學說	一九七
モ	
モルモット	二
ユ	
有機化合物	三五
遊戲本能	八二
有機感覺と感情	一〇三
有意的意思	一四五
游星	三七六
ヨ	
幼兒期	二三
幼兒の恐怖	七九
幼兒の憤怒	八〇

抑制不能と無氣力	一四七
ラ	
卵子の直徑と出産時の身長	二四
卵子の重量と出生時の體量	二五
卵細胞	一九五
リ	
利己的情緒	二九
利他的情緒	一三〇
倫理的情操	一三五
ル	
累犯	二八〇
レ	

戀愛と道德觀念……………九〇  
 戀愛と嫉妬……………一三〇  
 聯星……………三七二

□

論理的情操……………一三四  
 雙啞……………二二三  
 勞力自由……………四二七

### 索引 終

大正十年十二月三十日印刷  
 大正十一年一月十一日發行

(定價金參圓)

## 少年犯罪論

奧 付

不許  
 複製

著者 大澤 眞吉  
東京市麴町區紀尾井町三番地

發行者 山川 金五郎  
東京市日本橋區本銀町四丁目九番地

印刷者 五島 林太郎  
東京府豐多摩郡野方村大字下沼袋千百番地

印刷所 豐多摩監獄  
東京府豐多摩郡野方村

發行所 東京市日本橋區本銀町四丁目九番地  
 賣捌所 東京市芝區琴平町壹番地  
 賣捌所 大阪市北區堂島中二丁目貳番地

法律新聞社  
電話本局一、九三、振替口座東京七六七

日比谷書房  
電話芝局七、四三、振替口座東京五、三三

法政書房  
電話北局一、二五、振替口座大阪三、〇四三



終